



学会ホームページ <http://jasce.jp>

056号(2020年5月10日)

目次

第17回全国大会延期について
通信による総会の開催について
学会ワークショップについて
『協同と教育』への投稿募集中
各地の研究会・勉強会
ショートレター(会員からの投稿記事)

第17回全国大会延期について

今般の新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大をふまえ、今秋比治山大学で開催予定の第17回大会を次年度以降に延期いたします。

日本協同教育学会全国大会が広島で初開催されるということで、大会実行委員会といたしましても学内外の協力を仰ぎながら準備を進めてまいりましたが、学会理事会とも協議し、この度の決断にいたりました。参加、あるいは発表を予定されていた皆様、貴重な研鑽ないし、研究発表の機会をご提供することができないのは、大変心苦しい限りですが、まずは会員の皆様ならびにご家族・ご関係者の健康と安全を最優先いたしました。来秋に広島で開催される折には、会員の皆さまの研究発表を全力でサポートしていきますので、ご理解いただければ幸いです。

第17回大会実行委員長
比治山大学 佐々木 淳

通信による総会の開催について

新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大が収まらず、5月末まで緊急事態宣言が延長されました。会員の皆様、不便な生活を余儀なくされていると思いますが、くれぐれもご自愛ください。COVID-19の一日も早い終息を願っています。

さて、学会ホームページでもお伝えしていますように、この秋に予定していました比治山大学での全国大会が延期になりました。その結果、全国大会にあわせて開催していました総会が開催できなくなりました。そこで、理事会において検討していただき、今年度は「通信による総会」を開催することになりました。理事会での決定を受け、下記のように審議事項と手順を決定しましたので、ご報告いたします。

会員の皆様におかれましては、手順をご理解のうえ、総会に参加いただけますようお願いいたします。なお、今回の総会では、会費の値上げに係る議案の審議をお願いすることになります。その趣旨につきましては、事前送付する総会資料にて詳細にお示しますので、なにとぞご参加頂きますよ

うお願い致します。総会が遺漏なく終えられるように努力をしていますが、学会として初めての「通信による総会」です。ご不明な点などがあれば、事務局までお問い合わせ下さい。

日本協同教育学会会長

安永 悟

1. 総会審議事項

- (1) 2019年度会計報告および2020年度予算案承認の可否
- (2) 会費値上げ案承認の可否
- (3) 会則改定案承認の可否

2. 通信による総会の手順

① 総会参加対象者確定

今週、事務局から会員に一斉メールを配信します。学会に登録しているメールアドレスを再度ご確認ください。メールアドレスを変更されたい方は、JASCE会員情報変更フォームから手続きをお願いします。5月18日(月)までにメールが届かない方は事務局(office@jasce.jp)にお知らせください。

メールが届いた方の中で今年度までの会費を完納されている方、および6月までに入会が認められた方が、総会参加対象となります。2020年度までの会費を納めていない方は、6月10日(水)までにご入金ください。

JASCE

② 総会資料事前送付

6月10日(水)までに会費完納が確認できた参加対象者に、総会審議資料を事前にメール配信します。参加対象者の中で、6月18日(木)までに資料を添付したメールが送られてこない方は、事務局にご連絡ください。

③ 議案審議

6月18日(木)から7月9日(木)までの3週間を議案検討期間とします。資料をお読みになり、各議案について可否をご判断ください。

④ 可否判断表明

事務局より改めて議案に関する意思表示を問うアンケート(Googleフォーム使用予定)を行います。

回答期間は7月10日(金)から24日(金)までの2週間です。7月9日(木)までにアンケート回答フォームへのアクセスURLをお送りしますので、7月10日(金)の時点でメールが届

かない方は事務局にお知らせください。

⑤ 審議整理および結果報告

7月24日(金)までに寄せられた回答を整理し、翌25日(土)に通信による理事会を開催し、審議結果について付帯事項や表記修正など協議・確認します。理事会での最終協議を経て、総会参加対象者に7月26日(日)付で結果の速報メールを配信します。結果の詳細はニューズレター8月号および学会ホームページでご案内します。

学会ワークショップについて

今年度の学会主催ワークショップについては、当面中止といたします。今年度は、ベーシック5回、アドバンス2回、マスター1回を予定していましたが、ワークショップの性格上、濃厚接触のリスクが高い活動を伴いますの

で、苦渋の決断をいたしました。

ワークショップ再開の時期につきましては、研修委員会で慎重に検討の上、改めてご案内させていただきます。

『協同と教育』への投稿募集中

『協同と教育』への投稿を随時受け付けています。投稿受理から査読を経て採択が決定されるまでに通常数ヶ月を要します。編集委員会では学会機関誌『協同と教育』第16号(2021年3月発行予定)に向けての積極的な投稿をお待ちしております。

各地の研究会・勉強会

新型コロナウイルスの影響により、各地の研究会や勉強会についても延期や中止の検討または決定を余儀なくされています。詳細は各会の代表者に直接メール等でお問い合わせください。

ショートレター 会員からの投稿記事

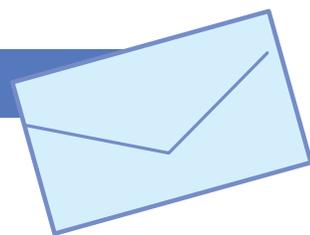
試験問題的な正解を求めてしまう習慣

高校でのいわゆる地域学の授業を参観する機会が増えた。地域で探究活動をする授業であり、その成果として生徒が地域活性化提案をする。その意義について、「これからの時代、

正解のない課題に向き合っていかなければならない。そのためには教室内での座学、受験勉強だけではなく、社会の現場の課題に触れながら学ぶことが大事である」という趣旨の文言

をよく見聞きする。また、「そうした経験が、生徒の地元就職や将来のUターンにつながる」と続くことが多い。

これらの言葉の解釈は人により少しずつ異なり、その実践となると大きな



JASCE

違いが出てくる。正解のない課題に向き合うことは、教師も生徒も不慣れなことであり、知らず知らずのうちに試験問題的な正解を求める思考になってしまうことがある。試しに、次の問題をやってみていただきたい。

【問題】ピンポン玉大の玉が10個ある。大きき見た目は同じだが、このうち9個は30グラム、1個だけ60グラムである。手元にある道具は、ヤジロベエの原理の上皿天秤だけ。60グラムの玉を確実に特定するには、天秤を最低何回使えばよいか。

一般的な解答は、以下のように「最低3回」というものであろう。

(1回目) 最初に5個ずつを天秤にかけ、(2回目) 下がった方の5個のうち4つを取り出して、2個ずつに分けて天秤にかけ、釣り合ったら残った1個が60グラム、(3回目) 傾いたら、重い方の天秤皿の2個を天秤にかけ、下がった方が60グラム。

しかし、「60グラムと30グラムであれば手で持てば違いが分かる」という解答もある。答案的には「最低0回」である。最低3回というのは試験問題的な正解のある問いに対する解答であり、教師も生徒も反射的にそれをしてしまうのではないだろうか。

では、玉の重さが60グラムと65グラムだったらどうするか。やはり、最低3回天秤を使って計測するのだろうか。確かに丁寧にやればできるだろうが、実際にやってみると、玉は天秤

皿の上をゴロゴロと転がり、静止してのせるのは難しい。ピンポン玉大のものを5つも一緒にのせるとなると、かなり大きな天秤皿が必要になる。ヤジロベエの原理の天秤では、玉を置く位置によっては正しく重さを判別できないことがある。



このように数学的概念の世界で問題を解くことと現場で実際にやることは違う。「手で持てば違いが分かる」という解答は、一見“現場的”であるが、まだまだ机上の話、試験問題的な正解を探す思考に留まっている。もちろん、数学的概念の世界を学ぶことは大事である。しかし、現場で実際にやってみないと分からないことはたくさんある。試しに、ピンポン玉大の玉を同時に5つものせられるような大きな皿の天秤を使って、2つ玉の重さを比較するとき私たちが何をやるか、目を閉じ、天秤に向き合っている自分の姿を想像してみていただきたい。

この問題を通して、教師が生徒に対して「机上の正解だけではだめで、現場で実際にやってみることが大事である」と体験的・教訓的・演说的に教えることは比較的簡単にできるだろう。しかし、それは、あくまでも教室の中の話である。生徒には、「人間の手の感覚は60グラムと65グラムの違いを判別できるだろうか」と考え、

実際に確かめてみる、あるいは感覚を研ぎ澄ますように練習してみるとという行動が望まれる。

地域学では、とにかくやってみることが大事だと思う。やってみて、例えば初めて逆上がりができたかのように、「あっ、こういうことなんだ」と分かる、その瞬間が大事である。為して学ぶ(Learning by doing) 経験である。逆上がりのアドバイスの定番は、「おなかをグッと鉄棒に引き付ける」「上に向かって蹴る」であるが、「上に向かって蹴る」などということは、逆上がりできた瞬間にしか意味が分からない。



社会の現場で学ぶ生徒にも「分かった!」という瞬間が多く訪れることが大事である。「人を巻き込む」「合意形成する」「先人の苦勞を知る」「交渉して協力を取り付ける」というようなことをやってみて、できた瞬間(できなかった時)に初めて実感するのである。教師には、その実感を生徒に意識づける対話が求められる。「対話的で深い学び」は、実は、教師の最重要課題だと思う。

(岡山大学地域総合研究センター
前田 芳男)